市川学園第三教育センター通信

実況中継「土曜講座」

第 １５ 号　　２０２４年3月２日発行

市川学園2月17日の土曜講座　於 多目的ホール

川島　真先生

中国近現代史研究と２１世紀の中国

東京大学大学院総合文化研究科教授

川島先生のご紹介

1992年 東京外国語大学外国語学部中国語学科卒業
1992年 東京大学大学院人文科学研究科東洋史学科修士課程入学
1994年 東京大学大学院人文科学研究科東洋史学科博士課程入学
2000年 博士学位（文学）取得（『中華民国前期外交史研究』）
2006年 東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻・助教授
2015 年 東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻・教授
（～現在）

主な講義内容の紹介

今回の講座は川島真先生による中国近現代史のお話でした。冒頭で先生は「歴史学者は歴史の物知りではないし、クイズ王でもない。膨大な歴史の資料を読み解き、証拠を集めて事実を作るのが歴史学者である」と話してくださいました。真実を追究するのではなく、可能な範囲で事実を作っていく仕事であり、新しい事実が分かれば教科書の内容も常に変わっていくため、今手にしている歴史の教科書や資料の内容も変動していく可能性があるとのことでした。先生は教科書編纂にも携わっている方であり、教科書作りの大変さも教えてくださいました。多言語取得、多様な価値観の受け入れが、新しい事実を生み出していくためには必要であるとおっしゃっていました。日々世界情勢が変わっていく現代に生きる私たちは、先生曰く「揺らぎ」の中にいる状態であり、「これが正しい！」と決めつけずに寛容な心で物事をとらえ、一つ一つに疑問を持つことが重要であると教えてくださいました。

具体的な話題としては、「冊封・朝貢関係は中国の資料と相手国の資料ではとらえ方が異なる」点や「勢力範囲、植民地、租借地の違い」、「軍閥」や「分裂」という言葉が抱える問題点などのお話がありました。様々な情勢について先進国の視点から見るのではなく、現地に即して現場から見ることによって見えてくるものが異なるし、その視点を持たなければならないというお話が非常に印象的でした。

受講レポートから

・最初、先生が軽いジョークを言ったり学者のぶっちゃけた話をしたりしてくれて、緊張がほぐれた。また、今回は中国の話だが、その話の中心においているのが研究で中国の概要から中国で起きた事柄、中国の細かいところなどの色々なことを分かりやすく、面白く話していて、とても興味深く楽しく聞けた。正直なところ歴史が苦手で、友達に合わせて講座に来たが、歴史が苦手な自分でも分かりやすく理解できた。少し分からない単語などあったがそれについても何となく理解できた。辛亥革命の話の時袁世凱からの視点や国民党の視点、議会の視点など色々な視点を解説していたが、この時の話が一番勉強になったし興味深かった。他には自分が知っていたことの理解を深めることができた。　（中１男子）

・先生からのお話は、自分が歴史で習っている中国に関連した近現代史のイメージとかけ離れていてとても驚きました。軍閥が割拠していたり、辛亥革命の袁世凱に対する悪いイメージがあったりする授業を受けているので、先生が最初におっしゃっていた最新の研究成果は教科書に書かないという話に深く納得しています。また、今までニュースなどで外交関連のトピックを見る時は教科書の通りの理解だったので、これからは先生のお言葉通り現地の状況にのっとって、他人の価値観を理解した上でニュースを見られるように心がけようと思います。　（中２男子）

・学者を好きでやっているわけではないらしく少し意外に思った。学説を疑うことの大切さを知った。教科書を一行でも変えることができる学者はほんの一握りなのに、学習指導要領や日本史と世界史にばらけていた歴史総合を作ったりしたという功績はすごいと思った。中国の経済は資本主義ではなく資本主義の要素を取り入れた社会主義なのに、自分は完全に資本主義だと思っていたりしたのであまり正しいと思っている知識を信用しない方が良いと思った。近年中国は台湾にプレッシャーをかけているので、習近平政権はいつか軍事侵攻をおこなうかもしれない。（中３男子）

・研究者という職業は今あるものごとを疑うことから始まるのだろうと感じた。今まさに授業でやっていることにも疑うべきことはたくさんあって、私たちはたしかにテストや受験のためにただ知識をつめこむけれど、その先ではつめこんだ知識にさえ疑いを持つべきなのだと実感した。中国の歴史についてほんの少し説明してもらっただけなのに知らないことが多く、教科書はごく一部であることを知った。中国だけでなくそれと比較した世界を見て、これからの時代を生きていくために多くのことを知って多様な価値観をもたねばならないと思った。
台湾のことは決して遠い国のことではなく、何が起きているのか、どうして起こったのかもっと知りたいと感じた。上辺だけの情報に振り回されて自分の一方的な考えで白黒つけるのではなく、もっと多様な見方をしてグレーゾーンにあるものごとを自分の目で見極めていきたい。川島先生のお話を聞いて、言語や文化の知識が自分の価値観に影響を与える可能性もあると感じ、もっと真剣に言語を習得しようと思えた。中国に対してマイナスなイメージを持つ前に、もっと歴史や文化を知るべきだと少し反省した。　（高１女子）

・私は世界史選択で、川島先生の携わった「世界史探究」を普段使用しているので大変興味深かったです。また、私は何か一つのものごとに熱中し深めるよりも広く浅く取り組むタイプなので、大学で今後とりわけやりたいことが見つからず、今の自分の進路に自信を持てませんでしたが、川島先生のおっしゃった「私は中国が好きなわけではない。今中国史を研究している理由なんてない。偶然の重なりだ」という言葉に、人生で一貫した意志を持って何かを自分のものとしなくても川島先生のように偉大な業績を残せることに感銘を受けました。また、教科書に記載する用語の改訂をめぐるエピソードなど、普段何気なく接している歴史用語教科書の一文にも莫大な時間がかけられ学者さん一人一人の意味が込められていることを実際に第一線で活躍されている川島先生から聞くことができてよかったです。　（高２女子）

（文責：野地　亜由美 先生）